
毒舌くのいち

神童サーガ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

毒舌くのいち

【著者名】

神童サーガ

【あらすじ】

毒舌くのいちと天然少年の話。少しツンデレくのいちです。

「カスガよ・・・」

「はい・・・」

場所は、木に覆われた山奥。

片膝立ちをしてる少女。高い位置からポニー・テールをしてるのに、腰まで伸びてる漆黒の髪。忍服を着ている少女カスガ。目の前には、白い髪を生やしている見るからに仙人な老人がいる。

「さつやと聞えよです。ジジイ」

「敬語が違うのか分らねーよ」

「ジジイも若者言葉使つんじゃねーよ」

さつやと聞えが違うのは驚くが、この際気にしないでいいようか。

問題は、ジジイの方だ。何なのか分らない。

「で、何なんだよです」

「もつ普通に喋る」

呆れたジジイ。話を続けたジジイ。

「天塚家の息子の護衛を任務とす」

「天塚家って・・・昔からの殿様家庭だよね」

意味が分りません。ジジイは説明をしなかった。理由は面倒だから。

「私達忍が代々仕てる偉いとこ」でしょ？」

「簡単に言えばな・・・」

ポンと手を叩いた。分ったよつて安心したジジイでした。

「その息子って、どんな奴なの？」

「一応偉いから言葉遣いには気をつける」

いや、ジジイもだよ。一応”つて・・・。

「とりあえず行つて来い」

詳しい内容を言わずに無理矢理追い出されたカスガ。

「！」が天塚家？」

旧家が聳え立つてゐる。日本庭園が見える。本当に今つて21世紀
つて思わせる。まあ、忍もだけど。

「うわお・・・女の子？」

「あの・・・男です」

見下ろすと制服を着てる少年がどうか分らない子がいた。
ワイシャツの首元を開けて、ネクタイも緩めてる。今時の若者つ
て風に制服を着込んでる。

男子制服なのに女顔だから、男装した女の子って感じ。

「キミは天塚家の者?」

「そうですが、貴女は?」

急に自分の家に、忍者のコスプレをした奴が現れれば動搖もする。オドオドした様子でカスガに話し掛ける。

「・・・守りたくなるか?」

失礼な発言だった。可愛いから守りたく無いのですか?カスガ。

「あの・・・」

「私はカスガ。貴方を守るために参上しました」

礼儀正しく、地面に手を付いて片膝を立てて。少年は、オロオロしだした。

「あ、えっと・・・あの・・・」

「お主が、くのこちか?」

聞き覚えの無い声がした。そちらの方を見ると、杖を付いた老人がいた。

「お祖父さま・・・」

「サヤ・・・この娘は、ワシリ一族を影から支えた者達の娘だ」

少年の名前はサヤらしい。やっぱり女の子っぽい名前だ。

「この娘は、この家に住まわせて、隨時サヤを守るのだ」

「隨時！？」

「住む！？」

老人の話にサヤとカスガは驚いた。

「もちろん寝る時もだ」

お祖父さまの発言に真っ赤になる一人。カスガも、毒舌ながらも女の子なのです。

「寝る時も・・・」

「お祖父さま、学校は？」

「もちろん行かせる

ボソツと言ったカスガの声は聞こえて無い。
カスガ達は、家に入った。

あつといつ間に就寝時。サヤの部屋は和室なので、布団を並べる。

「・・・えつとカスガ。明日からよろしくね

「嫌だけど仕方無いし」

カスガの言葉に苦笑いを浮かべたサヤ。

その笑みに顔が赤くなり布団に潜り込んだ。
その様子に笑いを堪えながら布団に入った。

「……ようじく

ボソツと聞こえたカスガの声に嬉しそうにするサヤ。無理をしないで、とサヤが言ったの、カスガに伝わっていただろうか。

「んっ……おはよカスガ……つてアレ?」

サヤが起きるとカスガはいなかつた。布団が綺麗に整頓されてたの見て、夢じやなかつたんだと安心したサヤ。

「おはようございますサヤ様」

「ん。敬語じゃなくて良じよ?」

寝ぼけ眼で、フニャと笑つたのを見たカスガは赤くなつて、フイと横を向いた。

「朝ご飯だね

居間に行くと、卓袱台の上に日本だ、という風な食事があった。
お魚から、卵焼きや、味噌汁があつた。
サヤは、ゆっくりと食べてる。カスガは、早田に食べてたので、
見守っている。

三十分掛けて食べ終わった。

サヤは、ノロノロと着替えに行く。カヌカは、庭を眺めてる。

「終わったよ」

「いやあ行こうか」

着替え終わった様子で、カスガと一緒に家を出た。
余談だが、カスガの格好は忍服。

「眠い」

「危ない！！」

寝ぼけて周りを見ずに歩いてたせいで、車が飛び出しが気付

かなかつたサヤ。

サヤの首に腕を回して止めたカスガ。

傍からみればカスガが後ろから、サヤを抱き締めてるよつに見える。

「つ・・・・・ありがと」

「マイペースなのは良いけど気をつけとよ」

後ろに感じる体温に身体が熱くなるサヤ。
なんとか冷静に堪えて答えた。

「おはよ・・・・・つてソイツは?」

学校に着いたら、すぐに友人が話し掛けてきた。

「あ、僕の護衛だつて」

「はあ?」

友人は、わけが分らないように言つたが、サヤの方が分らないだ
ろ？。だって、説明出来ないから。

「サヤくん」

クラスの女の子が現れた。
見た目は、ギャルの女の子だけど性格は真面目な子。
そして、サヤを好きなのだ。

「なに？ レイさん」

「付き合つて無い・・・ですよね？」

レイと呼ばれた女の子の言葉に、微かに頬を染めたサヤ。
カスガは、窓の外をボーッと見てるから気付いて無い。

「・・・サヤくん・・・私・・・好きです」

「なにが？」

マイペース故に鈍感なサヤだ。覚悟を決めたのに肩透かしなレイ
だった。

「・・・サヤくんが」

「・・・え」

突然の告白に動搖するサヤ。その告白を聞いたカスガは、クナイをレイに投げた。

クナイは、レイの足元に刺さり怪我は無い。

「カスガ！危ないだろ！…」

「つ・・・」

下唇を噛み締め逃げ出したカスガ。微かに涙目になつっていたカスガに、驚きを隠せないサヤ。

「カスガ・・・」

「あ、サヤくん」

「・・・ごめん。その告白は受けれない。今の僕には恋愛なんて分らないから」

サヤはカスガを追いかけるために教室を出た。

「なんで……イライラしたの……ムカつく」

自分の感情が分らないようだ。
ちなみに、今は屋上にいます。

「空は自由でいいな……」

雲一つ無い快晴に想いを馳せるカスガ。

「鷹？」

自分の飼っている動物が、自分の上空で旋回している。

「なに……え……サヤが!？」

どうやらサヤが、カスガを追つために学校を飛び出したようだ、

その時にどつかの悪い奴等にさらわれたようだ。

「私のせいだ・・・あんなバスに戸惑つたから

相変わらず毒舌が激しいカスガ。

「もしサヤに何かあつたら・・・覚えてろ・・・あのバスも含めて」

怒りに沸騰しているカスガ。ボソッと呟いた途端に消えたカスガ。

「・・・テメーらか?」

「んだと?」

どつかの廃墟に着いた。カスガの目の前には、繩で繋がれたサヤとヤクザっぽい人がいた。

「産業廃棄物のくせに・・・サヤに触れるなんて・・・消えてしまえ・・・燃えてカスになっちゃえ」

レイのこともあつたせいか、イライラの頂点・・・沸点を越してたようだ。

「明日・・・新聞に載るね・・・ボロボロになつた一人のボケ茄子が街中に放置つてね」

「！」

カスガに殴り掛けたヤクザAをかわして、ボソッと何かを言った。

「なに? 命乞いか?」

「さあ・・・パーティーの始まりだよ」

歪んだ笑顔で笑つて言つた途端に現れたのは、ネズミだつた。しかも、数万匹という大量。

ネズミは、ヤクザの二人にくつつき、二人の服を食い破る。捨てるが何万匹もいるので消えない。

カスガは、その間にサヤに近付きクナイで縄を切つた。

「大丈夫ですか？」

「ありがとう・・・カスガ」

「・・・なんでしょう」

仕事口調で話してゐるが、サヤに会い辛いため口ごもるカスガ。

「・・・聞いて？」

真面目な顔で言つてるサヤに戸惑いを隠せないカスガ。
仕方なく頷いた。

「まだ・・・僕には好きって分らないから・・・分るまで待つて
くれる？」

「私は・・・ただ、貴方を守ることだけが仕事なんです」

「うん・・・これからもよろしくね」

カスガに抱き付いたサヤ。カスガは真っ赤になつてゐる。
そして、カスガはキリッと顔をえて、サヤに聞こえないように
言つた。

「燃えるゴミでも良いけど・・・なるべく人の目に付く所に放置して・・・あと、人さらいをしたって紙を着けて」

近くにいた味方の忍者に言つた言葉だつた。
サヤを支えながら歩いて家に帰つた。

二人の表情は、晴れやかだつた。
どこの人よりも、主従関係が強くなりそうな二人だつた。
だけど、いつかはこの気持ちに変化がついて、二人の関係が変わ
る日が来るのだろうか。

ついでに、次の日の新聞には・・・。

『交差点に変態出現。

彼らの格好はボロボロで、ほぼ裸だつた。

警察は、彼らに着いてた紙を見て逮捕に踏み切つたようだ。』

「私の主に手を出す奴は・・・容赦しないよ

(後書き)

。不完全燃焼でした。 続きとか書きたいけどネタが浮かばないし・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4285f/>

毒舌くのいち

2010年10月28日08時24分発行